

読後感に通じるもの

押谷 一

一九五〇年代後半、日本の家庭では天皇位のしるしとされる三つの宝物になぞらえた三種の神器と呼ばれるテレビ、電気洗濯機・電気冷蔵庫があることが理想とされていた。

一九六〇年代半ばからは新三種の神器と呼ばれるカラーテレビ・クーラー・自動車が普及した。当時、電機メーカーの東芝は、「光る、光る東芝、回る、回る東芝、走る、走る東芝」と躍動的な明るい社会づくりを喧伝していた。作曲家の故山本直純も気球に乗って「大きいことは良いことだ」と派手なアクションで大きなチョコレートのCMに出演していた。一九六〇年代の日本は経済成長率が年平均一〇%を越え、世界的に例を見ない急激な経済成長を達成し、戦後の混乱を乗り越えた人びとは豊かさに酔いしれていた。

一九六四年には東京―大阪間を結ぶ東海道新幹線が開業した。脱サラした父親とともに大阪から東京に転居した我が家は三種の神器とは無縁な暮らしをしていが、幼い僕と弟は開業したばかりの新幹線に頻りに乗って大阪の祖父母に預けられていた。東京の実家にはないテレビがあり、前述のテレビCMなどを通して高度経済成長を感じていた。やがて、両親が創業した事業も経済成長に伴って拡大

し、少しずつ広い家に住むことが出来るようになった。両親は仕事優先であったが、食器戸棚には子どもが自由に使えるおカネが入っていた。大きな金額ではなかったが、月に何冊かの本やおやつを買うには不自由しなかった。当時のマイブームは、星新一のショート・ストーリーであった。星の物語は未来を描く一方、経済成長ブームに対する批判もあつて、多感な少年には刺激的であった。

『おいでてこーい』と題する物語は、都会に近い村にある小さな社（やしろ）が、がけくずれで流され、大きな穴が姿を現すことから始まる。村人たちが穴をのぞき込んでも、暗くてなにも見えず、「おーい、でてこーい」と叫んでみても、小石を投げ込んでみてもなんの反響もない。対策を相談された学者もその扱いに困惑するが、もつともらしく「埋めてしまいなさい」というと、ある人が「その穴をくれ」「その代り、社を立て直す」と申し出る。穴は、捨てたいものをなんでも引き受けてくれた。鉛の箱を運んできてなかの原子炉からの放射性廃棄物が捨てられたり、役人は不要になった機密書類箱を捨ててきた。約束通り集会場付きの立派な社が建てられ、都会の不用物は穴に投げ込まれた。都会では新し

いビルがつつぎと建てられていく。ある日、建築中のビルの鉄骨の上で鉄打ち作業を終えた工員が、ひと休みして美しい風景をみると頭の上の方から「おーい、でてこーい」という声が聞こえ、声の聞こえた方からは小石が落ちてくる。現代の社会問題のことをみてみるとペーソスの効いたこの物語を思い出し、デジャブ（既視感）も感じる。

未来小説といえはジョージ・オーウェルによる『1984』がある。一九五〇年代に発生した核戦争を経て、一九八四年、三つの超大国によって分割統治された社会の物語である。常に地域紛争が繰り返され、舞台であるオセアニアでは、独裁者による党の支配のもと個人の思想は常に統制され、市民は「テレビスクリーン」と呼ばれる双方向テレビや、街角に設置されたマイクによって監視されている。真理省の役人である主人公は、歴史の改竄を仕事としているが、体制への疑いをもつようになる。やがて恋人とともに思想警察に捕らえられ、取り調べと拷問によって自分の信念は打ち砕かれるが、党の思想を受け入れ「心から」党を愛すようになる。

星やオーウェルは架空の未来を描いているが、不気味なことに実際の出来事に符合することも多い。社会不安が充満した現代、もしかしたら書店や図書館に並んでいる膨大な書物のなかに未来を的確に予想したものがあるかも知れない。あまり明るい未来は期待できちよつと怖い気もするけれど。

へおしたに はじめ、酪農学園大学環境共生学類教授